慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中高ドイツ語宮廷長編物語に表現された「感情」と「規範」： ゴットフリートの『トリスタン』におけるminneとêreを例に
Sub Title	,,Emotion" und ,,Norm", in mittelhochdeutschen höfischen Romanen : am Beispiel von minne/êre in Gottfrieds »Tristan«
Author	中林, 練(Nakabayashi, Ren)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.203 (44)- 215 (32)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0203

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中高ドイツ語宮廷長編物語に表現された「感情」と「規範」

── ゴットフリートの『トリスタン』における*minne*と*êre*を例に ──[1]

中林　練

1　前提

中世ヨーロッパの文芸作品を読み解くと、中世の人々特有の「感情 Emotion」に気付かされる。このような「感情」は、近代合理主義的に構築された「理性 *ratio*」から切り離されているという意味での特殊性、他方で古典古代以来の「パトス *βαθος*」や「情熱・情念 *passio*」などといった概念と地続きであるという意味での普遍性を併せ持つが故に捉え難い。「われわれの現在を過去に投影」して中世を把握しようというスタンスは、すでに20世紀前半にフランスの歴史学者リュシアン・フェーヴル (Lucien Febvre, 1878 - 1956) によって「心理的アナクロニズム」であると批判されている[2]。では中世人の「感情」をどこまで正確に理解できるのか。その問いへの答えは今日も未知であるが、少なくとも中世人の「感情」の一端を当時の文芸作品の多様で複雑な表現形態の考察を通して再認識することは可能である。

また「感情」は常に無制限に、非理性的に発露されるものではなく、それを統御する「規範 Norm」と共に存在する。かつてアメリカの中世史家チャールズ・ホーマー・ハスキンズ (Charles Homer Haskins, 1870 - 1937) が「12世紀ルネサンス」として論じたような、中世ヨーロッパの社会・精神構造の劇的な変化において、修道院や大学が大いに影響力を高めた[3]ことを鑑みると、12世紀前後の人々には新たな社会的・精神的「規範」がそれまでに増して強く求められていたことが窺える。それ以降、ドイツ語圏の世俗民衆語 (中高ドイツ語) で相次いで書かれたミンネザングや宮廷長編物語、礼儀作法書等が「盛期宮廷文学 Hochhöfische

Literatur」としてドイツ文学史上の黄金期 (1170頃 - 1230頃) を形成する[4]。当時の宮廷人たちにとっては、フランスの宮廷で醸成された「礼節 *courtoisie* = 宮廷らしさ」を自らの世俗民衆語文学を通して、いかにドイツ語圏各々の宮廷に正確に継承するかが関心事であり、統一的な「法」を持たなかった当時の宮廷人は、この「礼節」、中高ドイツ語でいう *höveschеit* を自らの宮廷文化における新たな「規範」として内面化していったと考えられる。そのような「規範」の存在と影響は、社会学者エリアス (Norbert Elias, 1897 - 1990) が『文明化の過程』で論じたように、宮廷社会の「礼儀作法」の非画一的で漸進的な変遷に窺い知ることができるものである[6]。本稿はこの「感情」／「規範」の関係性を念頭に置いて、当時の文芸作品の一つを読み解き、それを通して中世人の「メンタリティ Mentalität」(「人間がいかに考え、行動し、知覚し、感じ取るか」[7]) のエッセンスを探る試みである。

2　ゴットフリートの『トリスタン』における「コード変換」

2.1　思想史的側面からのトリスタン物語の“改変”

13世紀初頭に書かれたゴットフリート・フォン・シュトラースブルク (Gottfried von Straßburg, 1170頃 - 1210頃) による宮廷長編物語『トリスタン *Tristan*』[8] (1210頃) は、前章で述べたような中世宮廷文化の「感情」／「規範」の関係性の一典型が象徴的に表現された重要な翻案作品である。しかし同時に彼の『トリスタン』は、伝承によるそれまでのトリスタン物語とは一線を画す深遠な主題を提示する作品でもあった。スイス出身のフランスの思想家ドニ・ド＝ルージュモン (Denis de Rougemont, 1906 - 1985) は、それまでのトリスタン物語にゴットフリートが意図的に施した“改変”を取り上げた。彼はゴットフリートによる“改変”の思想的基盤にある、12 - 13世紀にかけて南仏オック語圏を中心に急速に拡大したキリスト教異端カタリ派の善悪二元論的世界観を看取した。また彼はそれによって中世の宮廷における「愛 *minne*」にも、ヨーロッパの精神世界に脈々と継承されている「情熱 Leidenschaft」が色濃く反映されていること、そしてゴットフリートの『トリスタン』はこの壮大な精神世界を「情熱恋愛の神話」として包括的に表現したものであることを力説した[9]。実際には、19世紀以来研究者たちが試みてきたように、中世の宮廷における *minne* の多様な意義を一括し、「宮

廷風恋愛」として概念化するには、あまりにも複雑である。*minne*の思想的基盤には前提で述べた中世人の「感情」／「規範」それぞれが孕む普遍性／特殊性に関する諸問題が存在するからである。ゴットフリートの『トリスタン』の“改変”が今日まで研究者たちに突き付けているのは、まさにこのような中世独特の概念の持つ意味論的諸問題であり、ド＝ルージュモンの論はヨーロッパ精神世界において根源的な二元論的世界観から生じる「愛」と「結婚」(すなわち「感情」／「規範」) の本質的相克への着目[10]からその諸問題と一挙に全面対決する挑戦的試みであったと言える。

2.2　詩学的特徴としての「語のペア」

さらに「メンタリティ」に踏み込んだ意味論的アプローチを試みるならば、ゴットフリートが*minne*をはじめとする伝統的な宮廷的美徳を「コード変換 Umcodierung」して、それらの内的意義を改めようとしたことが注目される。その場合、従来の思想史的研究から「メンタリティ」の研究への移行を重視するドイツの中世史家ハンス＝ヴェルナー・ゲッツ (Hans-Werner Goetz) によれば、「思想ではなく思考法を、行動ではなく行動様式を調査する」ことが、研究上重要性を増している[11]。それは例えば作中に*minne*という語があればその一義性を思弁的に探究していくことよりは、むしろ*minne*という語と、「感情」／「規範」という観点からその関連語と解される「名誉 *ère*」との相関性から生じる*minne*の具体的な表れ方が変化していくプロセスを文脈に沿って検証していくことである。またこのようなアプローチにとっては周到にも、ゴットフリートの『トリスタン』には相互に強い関係性をもつ二つの語が一組のペアとして近接し無数に提示されているという特徴がある。トマス・トマーシェク (Tomas Tomasek) によれば、こうした「語のペア Wortpaare」は、喜び／悲しみ、生／死といった対義語的ペアだけではなく、類義語的ペア、*minne* / *ère*といった宮廷的美徳相互の関係性を示すペアなども含めて、全体でおよそ20000行に及ぶ詩行の中でおよそ3000箇所にも上る[12]。つまりゴットフリート自身が作中に挟んだコメントで、自分たち宮廷長編物語作者の役割を、華麗なタピスリーを編み上げる「彩色画家 *verwære*」の役割に準えている (4619 - 4688 ff.) ように、おそらくゴットフリートは一つの語を常に他の語と関連させて、物語を編み上げるように紡いでいく。またそれだけではなく、物語の進展を通して、その関連の在り方の多彩な変化を受

容者に巧みに披露することに強く意識を向けていたと推察される。総じてゴットフリートの『トリスタン』は、まず伝統通り旧来の*hövescheit*を基盤にして語られ、展開される語の含意が語りの流れに沿って緩やかに更新されていき、そのプロセス全体を通じ、最終的に当初の基盤であった旧来の*hövescheit*そのものが問い直される (「コード変換」される) という構造をもっている。

2.3 *minne*と*êre*の関係性に暗示された宮廷的「コード」とその“変換”

このゴットフリートによる「コード変換」が窺える好例として、中世学者アネッテ・ゲーロク＝ライター (Annette Gerok-Reiter) が注視している、物語上での*minne* / *êre*の関係の目まぐるしい変転がある[13]。

まずゴットフリートは物語の開始前に述べられるプロローグで、

> ***liebe*** *ist ein alsô sælic dinc, / ein alsô sæleclîch gerinc / daz nieman âne ir lêre / noch tugende hât noch* ***êre****.*
>
> (**愛 *liebe*** はこのように祝福されたもの、そしてこのように幸せにする骨折りであるもの、したがって誰もその教え無しに美徳 *tugende* も**名誉 *êre*** も持つことができないものである。)

と説く (187 - 190 ff.)。この箇所はひとまず*liebe* (*minne*) ≧ *êre* ＝「美徳 *tugende*」と読み取れる。さしあたりこの構図は*minne*を最大のテーマとする物語である『トリスタン』のライトモティーフを端的に表している。

しかし物語が始まり、やがて最初の重要なクライマックスの一つである、トリスタンとイゾルデが「愛の媚薬」を飲んで激しい思慕の念に苦しむ場面 (11745 - 11776 ff.) に差し掛かると、以下のように述べられる。

> *Tristan, dô er* ***der minne*** *enpfant, / er gedâhte sâ zehant / der triuwen unde* ***der êren*** */ und wolte dannen kêren. / „nein“, dâhte er allez wider sich, / „lâ stân, Tristan, versinne dich, / niemer genim es keine war.“ / sô wolte et ie daz herze dar; / wider sînem willen kriegete er, / er gerte wider sîner ger: / er wolte dar und wolte dan. / der gevangene man / versuochte ez in dem stricke / ofte unde dicke / und was des lange stæte. / der getriuwe der hæte / zwei nâhe gêndiu ungemach: / swenne er*

ir under ougen sach / und ime ***diu süeze Minne*** */ sîn herze und sîne sinne / mit ir begunde sêren, / so gedâhte er ie* ***der Êren****, / diu nam in danne dervan. / hie mite sô kêrte in aber an /* ***Minne****, sîn erbevogetîn: / der muose er aber gevolgec sîn. / in muoten harte sêre / sîn triuwe und* ***sîn êre****, / sô muote in aber* ***diu Minne*** *mê, / diu tete im wirs danne wê: / si tete im mê ze leide / dan Triuwe und* ***Êre*** *beide.*

(トリスタンは**愛の魔力 *minne***を感じたとき、すぐ考えたのは誠実 *triuwen* と**名誉 *êren***のことであり、それ „***minne***“ に背を向けようと思った。「そうだ」と彼は始終自分に言った、「やめろ、トリスタン、よく考えろ、そんなものには目もくれるな。」しかし心はそちらの方へ行きたがり、彼は自分の心と戦って、自分の欲望 *ger* とは反対のことを熱望した。彼はそちらへ行きたくもあり、またそれから離れたくもあった。わなに掛かった男はそのわな *stricke* から逃れ出ようと一度ならず試み、長い間頑張っていた。この誠実な人 *der getriuwe* が持っていたのは二重の胸にこたえる苦悩であった。彼が彼女の顔を見、**甘美な愛の女神 *diu süeze Minne*** が彼の胸と心をいとしいイゾルデで傷つけ始めると、その時はいつも**名誉 *Êren***のことを考えて、それ „***êre***“ が彼をそれ „***minne***“ から救い出してくれた。するとまた彼を襲ったのが、彼の世襲君主 *erbevogetîn* である**愛の女神 *Minne***であり、彼はまたもやこの女神の言うことをきかねばならなかった。彼を大変苦しめたのは自分の誠実 *triuwe* と**名誉 *êre***だったが、しかし**愛の女神 *minne***はそれ以上に彼を苦しめ、苦痛よりもさらにひどいことを彼にした。すなわち彼女は一層ひどい害を彼に加えたのだった、誠実 *Triuwe* と名誉 ***êre*** が一緒になってするよりも。)

ここでは一転して *minne* は美徳のイメージとは程遠い「魔力」[14]、「欲望 *ger*」、「わな *stricke*」、「世襲君主 *erbevogetîn*」である。そしてこれにより生じた *minne* と *êre* の明確な対立の渦中にあるトリスタンの心を舞台として、彼の葛藤、混乱が表現されている。同時に宮廷人の美徳として伝統的に高い価値を持つ *êre* と「誠実 *triuwe*」にトリスタンは縋ろうとするが、これらも“一緒に”(*beide*) トリスタンを苦しめる道義的圧力になっている。当時の伝統的な *minne* には、騎士が身分の高い既婚貴婦人へ愛を捧げる行為から、(とりわけ女性の側の)「姦通」という否定的含意が付きまとっていた。故にそれまでのトリスタン物語では「罪」と規定されるものであった。そしてゴットフリート版におけるここでの *minne* の含

意は、媚薬の持つ「魔力」によって騎士の罹った典型的な「病」、あるいは「理性の敵」としての「感情」の表象である。一方で伝統的な*êre*は当時の文脈では、公衆の前での外見上の輝かしさや、そこで人々の称賛を得る行為を行うことで得られるものであったので、*minne*とはその性格上反目し合う。したがってここではトリスタンは*minne / êre*のそうした伝統的な関係性ゆえに葛藤する、当時の典型的な騎士の心象を体現している。また興味深いことに、イゾルデの心理的葛藤の描写はここでは見られない。

次にこの対立の直後 (11789 - 11792 ff.) に、トリスタンの「心と思い *sîn herze und sînen sin*」の内においては以下のように「イゾルデ *Isôt*」と*minne*が*êre*に勝利する。

> *er nam sîn herze und sînen sin / und suochte anderunge in in, / sone was ie niht dar inne / wan Îsôt unde* ***minne****.*
> (彼は自分の心と思い *sîn herze und sînen sin* を手に取って吟味し、その中に何か変化はありはせぬかと探してみたが、その中にはいつもイゾルデ *Isôt* と**愛 *minne*** しか見つからなかった。)

しかし一旦は勝利を収めたかのような*minne*に対し、*êre*が再び巻き返しを図る (12511 - 12530 ff.)。

> *Swie sanfte uns mit* ***der liebe*** *sî, / gedenken* ***der êren****. / swer sich an niht wil kêren / wan an des lîbes gelust, / daz ist* ***der êren*** *verlust. / swie wol Tristande tæte / daz leben, daz er hæte, /* ***sîn êre*** *zôch in doch dervan. / sîn triuwe lag im allez an, / daz er ir wol gedæhte / und Marke sîn wîp bræhte. / die beide triuwe und* ***êre****, / die twungen ime sêre / sîn herze und sîne sinne, / die dâ vor an* ***der minne*** */ wâren worden sigelôs, / dô er* ***die minne*** *vür si kôs: / die selben sigelôsen zwô / die gesigeten an* ***der minne*** *dô.*
> (**愛 *liebe*** が我々にどんなに快かろうとも、我々は常にその際、**名誉 *êren*** のことも考えねばならぬ。肉体の欲望のほかは振り向きもせぬものがあれば、それは**名誉 *êren*** の損失を招く。トリスタンにとって彼が日々営んでいた生活がどんなに快かったにせよ、彼の**名誉 *êre*** は彼をその生活から引き離そうと

した。彼の誠実 *triuwe* は始終彼に迫った、彼がそれ „*triuwe*“ を忘れずマルケ王に彼の妻を引き渡すようにと。誠実 *triuwe* と**名誉 *êre*** の二つが彼の胸と心をひどく攻め立てて、以前に彼が愛 *minne* をこの二つを差しおいて選んだときには、**愛 *minne*** に勝ちを譲ったこの二人の敗北者が、今度は**愛 *minne*** に対して勝利を得たのである。)

ゴットフリートはここでの *minne* / *êre* の関係を、以前のそれらの対立関係と明確に対照的に描いている。この時点でさらにトリスタンの心と感覚の内において、*minne* が彼の「欲望」と、*êre* が彼の「誠実」と区別される。ゴットフリートはまず *minne* / *êre* の伝統的領分を截然と分けて考えている。また同時に *minne* / *êre* が宮廷的美徳として切り離せない価値であることも理解している。それらは「語のペア」としてこのように終始相互に影響し合いつつその他の概念を巻き込んで展開していくのである。ゴットフリートはそれに関し、この物語の内包する「欲望」、「誠実」といった概念の心的意義をも深く見極めており、物語の登場人物たちの心理描写の内で、ゲーロク＝ライターの言う「公的領域」と「非公的領域」の使い分け、すなわち「コード変換」を行わせているのである。

2.4 「公的領域」と「非公的領域」

この点で特に注目すべきは、イゾルデによる「非公的領域」での夫マルケへの策略の「公的領域」での取り扱われ方である。ゴットフリートはイゾルデの策略行為全てを、彼女が「公的領域」で常に外面的・社会的 *êre* を保持するための、「非公的領域」での内面的・個人的な「節度 *mâze*」によるものとする。そして終始その領域を使い分ける観点に立って、策略から生起するはずの彼女の罪責感を無化する。つまりイゾルデには、夫である王マルケとの「初夜」に自分の身代わりに密かに侍女ブランゲーネを差し向け、さらにはそのような自分の「秘密」を唯一知るブランゲーネを殺害しようとするという、「非公的」策略があるが、これらは皆、マルケに貞節を疑われたことによって「公的」な場で開かれる「神明裁判」に際して、イゾルデがトリスタンとの関係を秘密にし、偽りの誓いを立てることの正当性に結びつけられるのである (14225 - 14231 ff., 15751 - 15759 ff.) 。

Sus gies ir hêrren lôsende an, / biz daz sim aber an gewan, / daz er den zwîvel aber

lie / und aber von dem wâne gie / ir muotes und ir minne / und aber küniginne / mitalle unschuldic hæte / vor aller slahte untæte.
(こうして彼女は言葉巧みに夫君に取り入って、またもや疑惑を去り、彼女の気持ちと愛についての憶測を捨てて、再び彼女をどんな非行に対しても全く潔白であると思わせることに成功した。)

*die genert ir trügeheit / und ir gelüppeter eit, / der hin ze gote gelâzen was, / daz si an ir **êren** genas, / und wart aber dô starke von ir hêrren Marke / geminnet unde geêret, / geprîset unde gehêret / von liute und von lande*.
(彼女は二枚舌と、神に対してなした偽れる誓いのお蔭で助かり、名誉(***êren***)を失うことを免れて、再び夫君マルケ王にいたく愛し尊敬され、国中の人に賛美され礼賛されたのである。)

こうしてトリスタンとイゾルデの*minne*は、完全に「非公的領域」で「全く秘密に行われる」行為となり、一方その限りで二人の*ère*は「公的領域」ではその伝統的な尊厳を保持されるという、「平行状態」が続く。この「公的領域」と「非公的領域」の平行状態は、トリスタンとイゾルデの心の内に*minne / ère*の相互の影響関係のバランスを破綻させない範囲で、双方の価値の理想も追求し続けていくことができるという意味で、自由な地平を拓く。これにより得られる結果として、続く「愛の洞窟」の場面でトリスタンとイゾルデの*minne*は首尾よくも、従来の「トリスタン物語」で実現されなかったある一つの頂点に至ることに成功するのである。つまりトリスタンとイゾルデは、最大限に価値を高められた「非公的領域」で、清らかな女神*minne*の助けによって「理想の生活」を実現する。また敢えてそれを捨て、*ère*のために「公的領域」であるマルケの宮廷に戻り、人々の称賛をも受け続けるのである。

そしてこの場面以後王マルケの妻イゾルデへの*minne*は、イゾルデの外面的な美しさや*ère*に対する一方的な「欲望」としか解釈されなくなり、この場面を軸にトリスタンとマルケの立場が心理上では完全に入れ替わる。すなわち満たされぬ*minne*を一方的な「欲望」ゆえにイゾルデに捧げ、表向きの*ère*のために苦しみ、それを内面に封じ込め、さらに苦しんでいくという悪循環に陥るのが、トリスタンからマルケに切り替わる。総じてマルケの行為は、自らの妻イゾルデと

トリスタンの「非公的領域」での「秘密」である*minne*を、悪意ある人々による「公的領域」での「うわさ」のみで疑い、また*êre*ある潔白な二人を、「公的領域」で根拠なく追い詰めていく「愚行」であり、またさらに二人への疑念を自分のイゾルデへの盲目的*minne*とそれに基づく単なる体面としての*êre*のために無理に忘却しようする「自己欺瞞」でもあり、ゴットフリートはこれをマルケの「不実」、「不名誉」と断じる。

つまりゴットフリートの*minne / êre*の新たな判定の場は、マルケが場違いにも主導を目論見始める三角関係における相互の信頼感の変化という形で「公的領域」での関係から「非公的領域」での関係へと次第に移行され内面化される。こうしたプロセスを通して、「女神」としての*minne*が、王マルケの「欲望」としての*minne*と好対照をなしているということ、宮廷生活にとって不可欠なはずの*êre*が「欺瞞」(感情) に基づいてもいるということに、受容者は否応なしに気付かされるのである。

3　共同体的「感情」／「規範」意識の変化における宮廷人のメンタリティ

中世学者ユッタ・エミング (Jutta Eming) によれば、「中世のテキストにおいて、感情は概して専有的、一義的に登場人物の〈内面〉に位置しているのではなく、また (過度に圧倒的な)〈情動〉としてコンセプト化されているわけでもなく、むしろ中世社会の中心的な関心事を審議する歴史的コードとしてコンセプト化され、【そのような社会の】土台となるコミュニケーションの諸形式を構築している」[15]ので、ゴットフリートがトリスタンとイゾルデの関係を、終始一貫して「罪のない *rein* = 純粋な、清らかな、高貴な」イメージで描きなおすことができた精神的背景には、彼がコードとしての当時の伝統的*höveschеit*を前提として尊重した上で、それを物語上で変換させた登場人物たちを、新しい人間像のモデルとして明確に浮き彫りにする、という動機があったと解釈できる。それは例えばゴットフリートがトリスタンに関して「技能 (*fuoge*) と宮廷風の礼儀作法 (*höfscheit*) の習得にその生涯を捧げ、心を注いでいた」(7709 - 7711 ff.) と述べているところにも表れている。したがってこの物語の“改変”は、近代的解釈からみた場合のトリスタンとイゾルデの「宮廷風恋愛」の絶対化や神話化の次元においてよりも、物語全体に鏤められた語のペアと、それらの意味論的コード変換な

ど、詩学的設計の次元において緻密に施されていたと言える。このようなゴットフリートの創作設計の意識に、新たな「感情」／「規範」の表れが窺える。それはゴットフリートの『トリスタン』で「道徳心*morâliteit*」と呼ばれる概念に集約的に言表されている。

> *Under aller dirre lêre / gab er ir eine unmüezekeit, / die heizen wir* ***morâliteit****. / diu kunst diu lêret schœne site: / dâ solten alle frouwen mite / in ir jugent unmüezic wesen. /* ***morâliteit*** *daz süeze lesen / deist sælic unde reine. / ir lêre hât gemeine / mit der werlde und mit gote. / si lêret uns in ir gebote / got und der werlde gevallen; / si ist edeln herzen allen / ze einer ammen gegeben, / daz sî ir lîpnar unde ir leben / suochen in ir lêre, / wan sîne hânt guot noch êre, / ez enlêre* ***sî morâliteit****. / diz was ir meiste unmüezekeit / der jungen küniginne. / hie banketes ir sinne / und ir gedanke dicke mite. / hie von sô wart si wol gesite, / schône unde reine gemuot, / ir gebærede süeze unde guot.*
>
> (8006 - 8030 ff.)
>
> (これらすべての教えと共に、トリスタンがイゾルデに勉強させたことがもう一つあったが、それは我々が*morâliteit*と名付けるところのものである。これは優雅な礼儀作法を教えるのであって、いかなる婦人も若い時にはこれに専心するのが願わしい。この妙なる教え、*morâliteit*こそ幸福をもたらす清らかな教えであって、世にも神にもつながるものなのである。それはそのおきての中で我々に、神にも世にもかなう道を教える。それはあらゆる高貴な人の心に乳母の役目をし、それら高貴な心は自らの生命の糧をその教えの中に求める。というのは*morâliteit*の教えを受けずには、繁栄も尊敬も得られないからである。この*morâliteit*こそ若き王女（イゾルデ）が最も心を費やしたものであって、それでもってしばしば自分の心と考えを訓練し、そのおかげで彼女は礼儀正しくなり、心は美しく清らかに、挙動は好ましく立派になった。)

こうした*morâliteit*が「道徳感情」としても「道徳規範」としても機能するのは、宮廷的に洗練された「高貴な心 *edeliu herzen*」の内においてである。その持ち主はゴットフリートによればトリスタンとイゾルデ、そして彼らの物語を享受

し感動することのできる受容者たる理想的宮廷人のことである。とは言え当時の現実の宮廷社会は、これらの物語の中で描かれるような「高貴な心の世界」とはほど遠いものであった。ゴットフリートの『トリスタン』には、そのような理想と現実の相克の調和を図る倫理的意図がある。これには彼が、相次ぐ十字軍運動の不振や封建社会の揺らぎの過程で衰退していく騎士階級ではなく、当時勃興してきた都市社会の市民階級の出自であり、また「マイスター *meister*」という尊称で呼ばれる、聖職者 (Kleriker) か大学教師 (Magister) のような、倫理的・知的意識の高い「識字者 *literatus*」であったことが影響している。つまり彼が『トリスタン』を書いたのは、彼がおそらくは「キリスト教的騎士 *miles Christianus*」という13世紀の規範的人間像に、「識字者」として関心を持っていたからであると想定される。重要なのはこの時代の宮廷社会独特の「感情」／「規範」にある「メンタリティ」の変化という問題であり、それに対する宮廷人たちの過度に空想的な「ロマネスクへの逃避」といった事態に向き合う「識字者」としての反応である[16]。これは宮廷人の日常世界の対極として現れた農民の日常世界というグロテスクな世界の認識と、また「騎士的＝宮廷的な世界」の限界の自覚の表れであり、ゴットフリート以降の都市市民階級出身の長編物語作者たちは、初めからこのような地平に立っていた。またそれにより *minne* や *êre* などの宮廷的美徳にも、中世の人々を時に激しい行動に駆り立てる「感情」が潜在していること、同時にそれらにも確固たる「規範」が必要だということに目を背けなかったと推察される。ここで彼ら長編物語作者たちは美徳の意味の相対化を通して、現実の宮廷社会自体を相対視し、より広い都市的共同体へと人々を倫理的に結束させようという、ある種の高邁さをもった知的エリートとしての自己認識を持つようになった。その意味で、宮廷長編物語作者たちの詩学的プログラムとしての「高貴な心の世界」は、単なる宮廷人の現実逃避の場なのではなく、改めて高められた宮廷社会へと人々を誘う社会的再出発の場へと“変換”される。こうして彼らは、旧来の宮廷社会の見掛けの部分を問い直し、新たな「生活倫理」としての共同体的「感情」／「規範」へと受容者の意識を開いていくように物語を再活性させ、応用したのである。

註

1 本稿は2016年6月15日慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催された藝文学会研究発表会の発表原稿に基づいている。

2 リュシアン・フェーヴル「心理学と歴史学」（所収：L. フェーヴル、G. ドゥビィ、A. コルバン『感性の歴史』小倉孝誠編、大久保康明、小倉孝誠、坂口哲啓訳、藤原書店、1997年）、32頁を参照。フェーヴルの言う「歴史心理学」は今日「心性史」として一般に理解されているものであり、それに関して彼は同論考で文献学者の他にさらに「意味論学者」の重要性が高まっていくことを指摘している（同34 - 35頁）。

3 参照：C. H. ハスキンズ『十二世紀ルネサンス』（別宮貞徳、朝倉文市訳、みすず書房、2007年）、特に第十二章「大学の起源」。

4 Vgl. Volker Mertens: Die hochhöfische Zeit (1170 - 1230). In: Deutsche Literatur in Schlaglichtern. Hg. v. Bernt Wal und Volker Mertens, Bibliographisches Institut, Berlin 1990, S.52 - 74.

5 Vgl. Joachim Bumke: Höfische Kultur. Deutscher Taschenbuch Verlag, München 1986, S. 78 - 82.

6 参照：ノルベルト・エリアス『文明化の過程』（上巻：赤井慧爾、中村元保、吉田正勝訳、下巻：波田節夫、溝部敬一、羽田洋、藤平浩之訳、法政大学出版局、1977年）、特に第二章「中世の社交形式について」。

7 ハンス = ヴェルナー・ゲッツ『中世の聖と俗』（津山拓也訳、八坂書房、2004年）、136頁を参照。

8 テキストには、Gottfried von Straßburg: Tristan. Bd. 1: Text hrsg. v. Karl Marold. Walter de Gruyter Verlag. Berlin, New York 1977を使用した。引用部分の翻訳は、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク『トリスタン』（石川敬三訳、郁文堂、1976年）を参照しつつ適宜修正を加えたものである。また傍線、太字は筆者による。引用箇所に関しては本文中に行番号を付した。

9 Vgl. Denis de Rougemont: L'Amour et l'Occident (1936), dt.: Die Liebe und das Abendland. Aus dem Französischen von Friedrich Scholz, Kiepenheuer & Witsch Verlag, Körn, Berlin 1966, bes. S. 67 - 170.

10 Ebd., S.322 - 347.

11 『中世の聖と俗』、136頁。また同136 - 138頁を参照。

12 Vgl. Tomas Tomasek: Gottfried von Straßburg. Reclam verlag, Stuttgart 2007, S. 227.

13 Vgl. Annette Gerok-Reiter: Umcodierung: Zum Verhältnis von minne und ere in Gottfrieds ‚Tristan'. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 121 (2002). S. 365-389.

14 『トリスタン』の訳者石川敬三がこの部分で*minne*を「愛の魔力」と訳していることは示唆的である。

15 Vgl. Jutta Eming: Emotionen im ›Tristan‹, Untersuchungen zu ihrer Paradigmatik. V&R

unipress, Göttingen 2015, S. 7.

16 オットー・ブルンナー『中世ヨーロッパ社会の内部構造』（山本文彦訳、知泉書館、2013年）、109 - 114頁を参照。オーストリアの歴者学者オットー・ブルンナー（Otto Brunner, 1898 - 1982）はこの「キリスト教的騎士」という宮廷的規範に関し「ゲルマン起源の戦士階層および法生活と緊密に結びついている名誉の観念、古典古代およびキリスト教に由来するエートス、イスラームの文化世界からの刺激がここにおいて融合していた」とし、その背景として、封建社会が衰退していく一方で、教会の影響力が「神の平和」運動として勃興し、12世紀までに貴族たちにも広まって、政治や軍事的行為がある程度までキリスト教化され、「騎士的＝宮廷的な」、「キリスト教的世俗文化」を形成したと論じている。つまり勇気、正義、叡智、節度といった「ギリシアのポリスの中で古典古代の貴族制的基礎から形成された主要美徳は、ローマの貴族によって受け継がれ、そしてローマ教会の中で神学的な美徳に従属した世俗の生活倫理として受け入れられた」のだが、ブルンナーによれば「このエートスを最もはっきりと示しているのが、民衆語で書かれた騎士的＝宮廷的文学」であった。